ヨーロッパの街角から

山岳観光発祥の地
～スイス・リギ山～

11月になるとスイスの山岳観光地はオフシーズンに入る。秋の観光シーズンが終り、冬休みやウィンタースポーツにはまだ間があるこの時期。山岳ホテルはこれに合わせて休みをとることが多く、スイス中部にあるリギ山頂ホテルも12月下旬のクリスマスまで休業だ。麓のゴルダウはあいにく小雪の舞う天気だったが、運がよければ海抜1,800m の山頂は雲の上かもしれない。11月下旬、通年運行のリギ登山鉄道に乗って頂上駅を目指した。

山を観光に利用する考え方は18世紀のイギリスが発祥とされる。なるほど、それ以前の山は信仰の対象や芸術のモチーフであり、特別な目的を持つ人だけが登るものだった。市民も気軽に登山し雄大な眺めと自然を楽しむようになったのはここ200年ほどの比較的新しい余暇スタイルといえる。

リギ山頂ホテルはスイス最古の山岳ホテルとして知られ、アルプス観光化の先駆けとなったところだ。19世紀後半のホテル王セザール・リッツが一時期働いていたのもこのホテル。山頂に立つと360度のパノラマが広がり、チューリッヒやルツェルンといった都市に近い手軽さもあって、リギ山観光はヨーロッパ貴族の間で大いに流行った。

流行に拍車をかけたのが1871年に開通したヨーロッパ初のラック式登山鉄道だった。初めに建設されたフィッツナウ発の路線は、しかし、開業２年ほど山頂まで最後の２ km 区間を建設できなかった。というのもここが州境になっており、観光客がフィッツナウ側に独り占めされるのを恐れたシュヴィーツ州が許可を渋ったのだ。結局、シュヴィーツ州もゴルダウ発の登山鉄道を建設し最終区間は共同利用することで話はついたが、140年も前から観光客獲得の地域間競争が存在したとは。

さて、50分かけて到着したリギ山頂は、やはり真っ白いガスの中。同じように考える人はいるもので10人ほど同乗していたが、ほとんどは寒さに震えながら10分後の下り便にそそくさと乗り込んでいた。ベビーカーを押す若い家族連れもこの天候では身動きがとれない（写真）。リギ山の観光パンフレットにはベビーカー用、車椅子用のハイキングコースも紹介されており、穏やかな天気ならベビーカーを押して山を歩くのも悪くない。

アルプスといえば今も日本人に人気の観光地。日本人観光客は相変わらず多いが、ここ２、３年それを圧倒するようになったのがインド人観光客だ。この日も数人のインド人グループが山頂駅で記念撮影に興じていたし、アルプス観光のメッカ、ユングフラウヨッホに至っては観光客の約４分の１がインド人と、その数に度肝を抜かれた覚えがある。ヨーロッパにはない5000m 超の山が居並ぶ国なのになぜアルプスに惹かれるのか、理由を尋ねてみたいものだ。

そういえばスイスのテレビでインド映画の話題を放送していた。「インド人映画監督がアルプスへロケに来て、笑いあり踊りありの映画を撮影する」というストーリーの劇中劇。私も顔を知っているインド人スターが主演しており、インドにおけるアルプスブームの一端を垣間見せていた。

18世紀に貴族の流行として始まり、20世紀終わりからは日本人が押し寄せ、最近はインド人が激増。アルプス観光はある意味、世界の趨勢を映し出す鏡になっている。

（在独ジャーナリスト　松田　雅央）

リギ登山鉄道の山頂駅。先頭はラッセル車